

新製品開発におけるフロント・エンド・ローディング

‘世界を驚愕させる日本製品と技術力’

— 技術とテーマの創造 —

(株)ジョンクエルコンサルティング 落合 以臣

A Front End Loading in New Product Development  
‘Japan products in the world and technical capabilities’

– Creation of technology and themes –

Shigemi Ochiai, Jonquil Consulting Inc.

**Keywords:** 技術立国・脆弱・商品・製品・意思決定・価値・総合力

我が国が技術立国と言われてから、おおよそ七十年の歳月が過ぎようとしております。もともとは、経済的・政治的・軍事的なパワーを援護するような、いわばテクノ・ナショナリズムの思想が、技術に関する支配的なイデオロギーのひとつとなって、19世紀以降に台頭してきたといわれています。敗戦国という立場であった日本は、欧米の力を借りて技術移転を促進し、欧米との間の技術格差を縮めようと猛努した結果、今日があるといっても過言ではないでしょう。

こうしたことに鑑みますと、中国のように圧倒的な経済力を片手に世界に殴り込みをかけたところで、それは一瞬のカンフル剤としての役目しかならず、その国にじわじわ浸透していくためには、それを支える技術力が必要です。この話の信頼性はわかりませんが、16日のネット報道によれば、中国の全国人民代表大会で、「爆買いを多くの規制で抑制しようとしても、中国国内に品質のいいものがなければどうにもならない」という李克強首相の発言は、経済の覇者になってもそれを支える技術がなければ、悔しいが日本のような国にはなれないと言いたかったのではないのでしょうか。バブル経済以降、停滞した我が国の政治・経済をよそに、着々と手を打ってきたはずの中国でしたが、フィリピンでの鉄道事業の中止というより放棄、南アフリカ諸国での道路工事の杜撰、ミャンマーでの火力発電の中心となるタービンの不良など、数上げればきりが無いほど露呈し始めています。この惨状は、まさに脆弱な技術力によって引き起こされた結果といえます。しかしながら、この現象は、今の日本の状況とは比較にすることのできないことではあります。技術立国というお墨付きに安住することなく、さらにその先を目指していくという意味では、中国の世界における“様(ごま)”は、優越感に浸ることではなく、数十年先の反面教師として捉えた方がよいのではないのでしょうか。特に、最近の企業は基礎研究に依拠した商品・製品開発を行わず、応用研究、あるいは技術開発からスタートする企業が多いといえます。この結果、斬新的な商品・製品ではなく、酷似したものが氾濫していると言っても過言ではないでしょう。

こうしたことが背景となって、日本の経営者は意思決定をしていないというより、意思決定をしなくてもよい状況になっているといった方がよいかもしれません。もう少し深く研鑽しますと、技術の延長線上での商品・製品づくりに慣れているために、数年先の世情を背景とした消費者ニーズを的確に捉え、そこからテーマの創出を行い必要となる機能へ落とし込むという方法に慣れていないようです。したがって、先進的な商品・製品を創出しているはずが、いつの間にか技術の延長線上にあるものがテーマを創造しているという錯覚を起こしていることに気づかない状況にあるといえるのではないのでしょうか。この状態を長く続けてきたために、周辺技術の細かい部分は特許を取得することによって防御はできるものの、革新的な技術の開発に遅れをきたしているといえます。また、このような状態の中では、経営者が口を挟む隙もなく、結果的に意思決定をしなくても済む状況に置かれているのかもしれない。今重要なことは、企業としての総合力を発揮させることであり、そのための意思決定が必要と思われます。そのためには、もう一度“技術とテーマ創造”のマッチングが重要となります。

この JQ International Review が、愛読される方の背中をさらに押すことができれば幸いです。